

## 複数のPDCAサイクルに基づいた 短大生向け就業力育成支援システムの設計

石塚丈晴<sup>†</sup> 弘中大介<sup>†</sup> 藤井厚紀<sup>†</sup>

現在の短期大学には、意識の高い学生から学習・生活意識全般が低い学生まで、幅広い学生が入学してくる。短期大学は通常2年間といった短い修学期間内に、卒業後の進路を見据えて指導をしなければならないが、特に低い意識の学生に対しては、eポートフォリオなどをそのまま利用するのではなく、学生の希望進路に合わせて、入学時から卒業時までの具体的かつ明確な行程表を提示し、学生と教職員が一体となって進捗状況を確認・管理するための支援システムが必要であると考え、設計を行った。

### System's Design for Career Learning Based on Multiple PDCA Cycles for Junior College Students

Takeharu Ishizuka<sup>†</sup> Daisuke Hironaka<sup>†</sup>  
and Atsunori Fujii<sup>†</sup>

A system which supports students' career learning has been required at junior college. This paper shows the design for such a system with "to do list for every week" and "goal for every semester" based on multiple PDCA cycles for 2 years of junior college.

#### 1. はじめに

現在の短期大学には、短期大学での学習内容を理解した上で目的意識を持って入学してくる意識の高い学生もいる一方で、特に本学のように保育士養成などの資格系ではない短期大学へは、4年制大学に入学できなかった学生や学習・生活意識全般が低い学生まで、学力だけではなく、学習習慣や生活習慣についても幅広い学生が入学してきている[1].

短期大学は通常2年間といった短い修学期間のため、卒業後の進路について1年次の後半から動き出さなければならない。文部科学省の初等中等教育のWebサイト[2]でも示されているように、「子どもたちが「生きる力」を身に付け、明確な目的意識を持って日々の学業生活に取り組む姿勢、激しい社会の変化に対応し、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付け、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育の推進が強く求められて」いるが、まさに本学の学生にも当てはまることである。しかし、前出の低い意識で入学した学生の意識を、入学後半年間程度の教育で変えていくことは非常に難しい現状がある。

#### 2. 先行事例と本研究の目的

ICTを活用したキャリア教育として、近年はeポートフォリオを活用したキャリア教育を導入している大学が増えてきている(例えば[3][4])。本来、ポートフォリオは、ピアジェの構成主義や、ヴィゴツキーらの社会構成主義などに基づき、学習者が主体となって行うものである。しかし、この方法で対応できる本学の学生は、意識の高い一部の学生に限られる。そこで本研究では、学生の希望進路に合わせて、入学時から卒業時までの具体的かつ明確な行程表をシステムが提示し、学生と教職員が一体となって進捗状況を確認・管理・評価することを通して、学生の学習・就業意識を徐々に高めるための支援システムを設計することを目的とする。

#### 3. システムに求められる機能

##### 3.1 概要

本研究で対象とするのは、入学時の学習意欲や就業意欲などが低い学生である。こ

<sup>†</sup> 福岡工業大学短期大学部  
Fukuoka Institute of Technology, Junior College

の様な学生の入学動機は、高校教員や保護者などから勧められたからという場合が多く、自らの意思では無く、他人の指示によって進学してきたと言っても過言では無い。そのため、短期大学卒業後の進路についても、自ら考えている学生は多くなく、ある程度の段階まで、教職員側が細かくやらなければならない事を、指示する必要があると考えられる。

そこで、就業意識が低く自主的に学習・就業活動ができない学生に対し、希望進路を設定すると、職種などに応じてあらかじめ登録されたパターンに沿った週単位での具体的な「やることリスト」を提示すると共に、半期毎のスケジュールを卒業までの2年間分提示するシステムが必要となる。学生は、まずはこの週毎のスケジュールをこなすことから始まり、習慣化させることで徐々に学習意欲や就業意欲を身に付けるよう、教職員が指導を行う。

### 3.2 既存のシステム

本学では、これまでに学生指導を円滑に行うためにいくつかのシステムが既に開発されて可動しており、それらを活用した指導が行われている。

その一つに、デジタルキャンパスと呼ばれるシステムがある。このシステムでは、主に学生の出席管理が行われている。本学では授業への出欠管理を厳格に行われており、教員は担当授業毎に履修登録されている全学生の毎回の講義への出欠、遅刻などの記録を CSV ファイルで提出し、システムで一覧表示させることで学生への指導に活用している。

もう一つには、学生カルテと呼ばれるシステムがある。このシステムでは学生毎のページが用意され、教職員が学生に対するコメントを自由記述で記入していくもので、主に教職員間での学生に関する情報の共有に用いて、指導に活かしている。

上記のシステムは原則としてアクセス権は教職員にのみあり、学生が自由に閲覧することはできない。教職員がシステムにアクセスし、状況を把握してから学生との面談に望むといった方式がとられている。特に、学生カルテの内容は原則的に学生には見せないこととしている。

### 3.3 運用のイメージ

図1は本研究で設計するシステムの運用イメージを示した物である。まず、学生が卒業後の進路を設定すると、それに応じた1週間毎のストーリー（「やることリスト」と半期毎の中間目標）を表示する。学生はいくつかの進路を試しに入力して、ストーリーを比べ、第1希望の進路を決定する。その後、担任と学生とで協議して担任が確定の処理をする。

表示された「やることリスト」に対する進捗状況は、学生、教員と事務職員（学務、就職担当）の両者が連携して随時更新する。教員と学生はゼミの時間（面談指導の時

間）に、教員は学生による進捗状況への評価に加えて、既存のシステムの機能を用いた出欠状況や学生への自由記述コメントも参照しながら、面談した結果も踏まえて進捗状況について評価を行う。また今後の「やること」について、確認を両者で行う。この週毎の小さなPDCAサイクルを繰り返しながら、半期毎の大きなPDCAサイクルを繰り返して卒業に至る。

この運用イメージを実現するためには、膨大な情報を一元的に管理し、かつ必要な時に必要な情報を提示する支援システムが必要となる。このシステムを活用することで、

- (1) 学生が今までに行った事を可視化して達成感を得るとともに、ゴールへの可視化を通して自主的な意欲を身に付ける。
- (2) 教職員の効果的な指導に活かすことが期待できると考えられる。

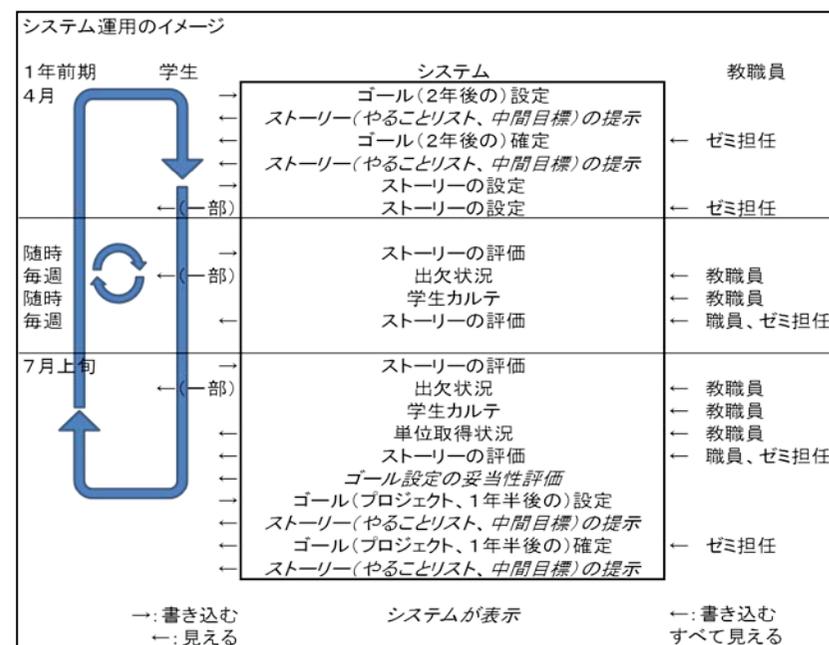


図1 運用のイメージ (1年生前期)

### 3.4 システム利用のイメージ

図 2 は、「やることリスト」ベースのシステム利用イメージを示している。図中の(1)から(4)は、以下のことを表わしている。

(1)「やること」はシステムが自動的に提示するものと、学生が個別にシステムに追加して登録することができるものが表示される。「やること」には必ず期日が設定され、進捗状況をシステムが管理する。

(2)教職員は、「やること」に対して、コメントやアドバイスなどをシステムに入力する。必要に応じて、毎週のゼミの時間などに学生と面談を行い、「やること」の修正をさせたり、補足コメントなどを記入したりする。

(3)学生は「やること」をやり終えると、日付と簡単な自己評価(ABCや○×など)をシステムに入力する。

(4)教職員は学生の結果に対する評価を行い、システムに登録する。

これらを毎週繰り返して積み重ね、両者で振り返りを行うことにより、学生の達成感と意識の向上を狙っていく。

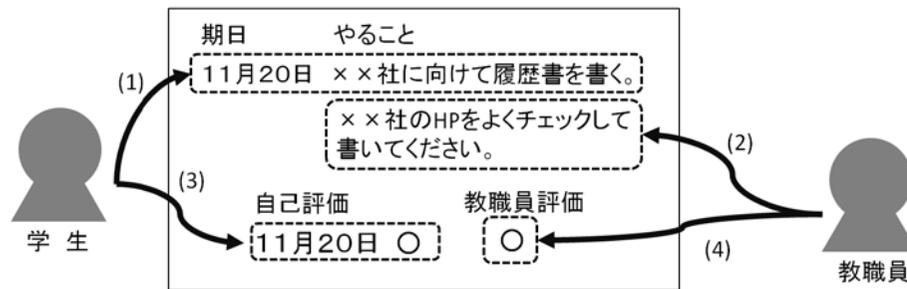


図 2 やることリストに対するシステム利用のイメージ

## 4. 現在の進捗状況

システム開発のための要件定義・仕様確定を行うためには、必要な機能や利用方法などを明確にする必要がある。そこで現在は、毎週のゼミの時間を利用して、紙ベースで一週間に「やったこと」について報告書の記入を学生に行わせ、それを基に教員が指導を行うという形式をとりながら、検討を行っている。

現在は紙ベースで行っているため、学生には毎日の簡単な記録を手帳に記入させ、週1回報告書に転記させている。また、教員は紙ベースでの報告書を学生毎に分けて保管し、始動時に参照している。しかし、この形態の場合、学生・教員の双方共に負担感や不便さを感じており、本システムの開発が期待されている。

また、システムで表示する進路別の「やることリスト」は、現在は教職員が経験やノウハウとして別個に持っているものである。そこで今後は、これらを明確にすると共に、時期などの設定についてを検討し、進路別にリスト化することが必要である。

## 参考文献

- 1) 石塚丈晴, 小田誠雄, 安部恵美子: 情報系短期大学新生における一年生前期までの学びと生活に関する調査結果の分析, 日本教育メディア学会研究会論集, No.30, pp.35-38 (2011)
- 2) 文部科学省: キャリア教育, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/index.htm), (2011/11/16)
- 3) 吉田咲子, 安部一晴: キャリアデザイン講座 I における e ポートフォリオ活用, 京都光華女子大学研究紀要, No.48, pp.273-301 (2010)
- 4) 梶木克則: 就職支援に向けた e ポートフォリオの活用について, 甲子園大学紀要, No.38, pp.119-124 (2011)